

# 大阪府立泉南支援学校 平成 26 年度 第 2 回 学校協議会 記録

1 日 時 平成 26 年 10 月 28 日 (火) 10:00～12:00

2 場 所 大阪府立泉南支援学校 会議室

## 3 次 第

- (1) 校長あいさつ
- (2) 学校の様子報告
- (3) 協議「社会的自立(生きる力)を育てる～それぞれの支援の立場から～」
- (4) 報告
  - ・平成 26 年度 学校経営計画進捗状況
  - ・平成 26 年度 授業アンケート集計結果(生徒用)〔すながわ高等支援学校〕
  - ・平成 27 年度 教科書選定について
  - ・高等支援学校オープンスクール報告
  - ・大規模災害に対する取り組みについて
  - ・その他
- (5) 意見交換・まとめ
- (6) 校長あいさつ

## 4 今後の予定

◇ 協 議 「社会的自立(生きる力)を育てる～それぞれの支援の立場から～」

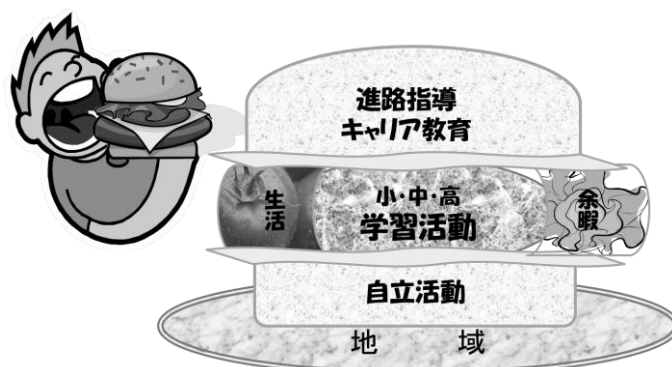
### <協議内容抜粋>

(司会) 第 1 回協議会において委員に対して、標記の「生きる力」についてご提言いただくようお願いしていましたので、各委員にご協議いただきたい。

(司会) まず、両校から、「生きる力」の育成について現在どのように取り組んでいるか発表していただきたいと思います。

(泉南支援学校) 泉南支援学校では、「生きる力」の育成を、人がバランスよく栄養を摂取しながら心や体を成長させることに例えて、教育活動をイメージしたモデルを提示しました。小中高の一貫性のある学習活動に生活力や余暇活用を加え、自立活動とキャリア教育や進路指導ではさんだモデルです。(図)

進路指導は、「ライフスタイルに応じた進路の取り組み」として企業や障がい福祉サービス事業所等活動内容に応じた就労ニーズを育てていくこと。小中高と卒業後をシームレスにつなぐこと、また、職員の研究・研修を通して「キャリアマトリックス」の作成や教育課程への反映を目指すことが大切であると考えています。一方、自立活動は、「個々の障がいに応じてつきたい力」を育てるために、自立活動をすべて



図：泉南支援学校「生きる力」ハンバーガーモデル

の教員で取り組み、更に知的障がいのある支援学校としては特色ある専任指導部を擁して個別抽出や小グループ指導などに取り組んでいます。

(すながわ高等支援学校) 様々に変化する社会情勢に対応して、また、多様化する本人保護者のニーズに対応して「社会への適応する力を育てる」ことが「生きる力」の育成であるにとらえている。現在は第1学年のみであるので働くことの基礎・基本づくりに取り組んでいます。「問題解決の力」や「プレゼン力」を今後も育てることが大切であると考えています。

(委員A) 保護者の立場から、就労体験は有難い。また、重度の知的障がい者にとっては、人生を楽しく過ごせるように幅広い指導を行ってほしい。また、親亡き後をどのように生きていくか？周りの協力を得ながら生きていけるような力をつけてほしいと考えています。

(委員B) 福祉施設運営の立場から、実習生の受け入れに際しては、障がいはひとつの個性ととらえ特別扱いするのではなく、能力に応じて仕事をしてもらっています。“笑顔で挨拶”“時間厳守”“他者へのSOS”ができるように育てていきたいと考えています。

また、現場実習後の保護者の感想文集の中で「今は学校と言う守られた環境の中で恵まれているが、卒業後、一般社会でどれだけ受け入れてもらえるのか」、「実習で、この子達にできることもあることを知ってもらい障がい者のイメージを変えてもらえる機会となったら…」とのことばを印象深く受け止めました。

(委員C) 卒業後の施設を運営する立場から、仕事ができても他者との共存が難しいケースと仕事はゆっくりだが他者との共存がスムーズなケースがあり、“迷惑をかけない”とひとことで言っても、いろいろなおとなえ方があると思います。一人ひとりの力を伸ばすことが大切であると思います。

(委員D) 就学前施設を運営する立場から、「生きる力」は保育計画に位置付けられ大切な目標となっている。保護者の障がい受容などもサポートする必要がある。その中でも「人に伝える力」は大切であると思います。

(委員E) 地域住民の立場からは、「何か手伝ってほしい」とか「助けてください。」など自分にとって必要なことを相手に伝える力を育ててもらえば、地域の住民はきっとそれを受け止めて支援することができると思います。

(委員F) 企業経営の立場からは、企業の使命は社員の福利厚生と納税です。企業として就労する生徒に最も期待することは、“自分で会社に来る”ことです。会社に自分で来れば会社は何とかします。会社に来れば“必要に応じて他人を頼る”ことも必要な力かもしれません。この二点ができることが大切であると考えます。

また、学校への要望として、「企業関係者が学校に見学できる機会を増やしてほしい。」「保護者の本音を企業に伝えてほしい。」があります。

(会長) 『みんなちがう』けれど『みんなおなじ』という『異質同等感』で、支援教育では『生活力』『学力』『作業力』を育て、福祉サービス事業所では『生活カススキル』『作業カススキル』を向上させる。」との話があり、それぞれの委員の提言を学校として受け止めて「生きる力」を育ててほしいとのまとめがされました。

(泉南支援学校長) 高等部(砂川校) 卒業の各学年の企業就労者は約3割ですが、ご提言のとおり『SOSを出せるか』が「生きる力」として大切であるとよくわかりました。しかし、障がい福祉サービス事業所に進路を決める残り7割の生徒においては、障がいの重い人たちであれば『Yes/No』『快/不快』を伝えられることなどが重要になる場合もあります。

個々の障がいに応じた個々の課題を「自立活動」として取り組み、ひとりひとりのニーズに応じて指導をおこなうことが大切であると考えています。と終わりの挨拶がありました。